

古写真研究プロジェクト報告

和歌山県湯浅町民歴史講座「菊池海荘と菊池(垣内)家史料」

保谷 徹

菊池(垣内)家は、紀州栖原(和歌山県湯浅町)に本宅を置き、江戸で干鰯問屋(本家)や砂糖・薬種問屋(新家)を営んだ全国レベルの豪商である。また、幕末に出た新家の菊池海荘は、紀州藩地士として海防や農兵取立に取り組み、藩や朝廷に献策した。漢詩人としても著名であった。この両菊池家の史料群は、東京大学史料編纂所(以下、本所)と地元湯浅町に分かれて所蔵されており、古写真研究プロジェクトでは調査と整理を進めてきた。ここでは、二〇二二年三月二一日、湯浅えき蔵で開催された町民歴史講座の内容をかいつまんでご紹介したい(湯浅町教育委員会主催・参加者六三名【写真1】)。

一六世紀半ば、肥後菊池氏の末裔菊池武行(一五二九―一八三三)が家臣らと紀州栖原に移住し、栖原垣内氏となった(幕末から本姓の菊池を名乗る)。菊池本家の史料群は、一九八五年に本所へ寄贈され、山口啓二・静子夫妻が整理にあたられた(菊池薫氏旧蔵史料約六〇〇〇点)。二〇二一年、書籍・書画類を中心に本家に残されていた史料群(菊池明石氏旧蔵史料)が新たに追加寄贈され、村井章介東京大学名誉教授の整理を経て本所と湯浅町で引き分けている(本所分約八〇〇点/湯浅町分約五四〇点)。一方、菊池新家の史料群(菊池武昭氏旧蔵史料)は、二〇一一年に一部が先行して湯浅町へ寄贈され、ついで二〇一六年に残りの史料群が本所へ持ち込まれ、数年間かけて整理して今回本所と湯浅町で引き分けた(本所分約三四〇点・写真史料二六〇〇点/湯浅町分約三三〇〇点)。両菊池家(本家・新家)史料の湯浅町分は、当面の寄託先である和歌山県立博物館へ移送されている。

1 菊池(垣内)家と菊池家史料

まず、菊池家の歴史を著したものととして、菊池三九郎(晩香)『黄花片影』(一九一八年)のほか、「南紀菊池氏伝」稿本などがある。南朝の武将菊池氏

にまつわる史料として、「菊池武重起請文」(一三三八年)の刷物や、菊池神社所蔵の「●菊池武光書状」(二三六一年)の写し、「鎮西菊池軍記」(一八二六年版)などがあった(●は本所、無印は湯浅町所蔵分)。初代武行が紀州栖原に入った際に持参したという「菊池槍」も残されている。また、和歌山城主浅野幸長から与えられた「●浅野幸長送船印判状」(一六〇一年)は、両家コレクションで最も古い文書になる。

2 豪商としての菊池(垣内)家

本家六代目了玄(一六七八―一七三五)は、享保四年(一七一九)、江戸茅場町に干鰯問屋栖原屋三九郎店を開いた。次いで、本家八代(新家二代)義同(一七二三―一八〇四)が、天明二年(一七八二)、江戸新和泉町に薬種・砂糖問屋河内屋孫左衛門店を開く。義同は兄の死により本家に戻り、二男淡斎(一七六六―一八二二)に新家を継がせて孫左衛門店を与えた。江戸の両店は本店・支店の関係として豪商垣内家を支える。

その後、本店(干鰯問屋)は本家九代茗溪(一七九五―一八四〇)の文化一三年(一八一六)、深川西永代町に移っている(●西永代町本店敷地図)。菊池新家が営む砂糖問屋は、江戸一番の規模であった(新井敦子氏のご研究による)。店の帳簿や証文など、一番大事な書類は背負紐付きの「帳箱」に入れてあった。このほか、砂糖問屋の看板や「家法帳」、「奇応丸版本」、新家の「国元宅絵図」、徳川治宝から拝領の「花活」や「拝領盃」などを画像で紹介した。



写真1 湯浅町民歴史講座会場の様子(湯浅町教育委員会提供)

3 幕末の地士菊池海莊

新家四代の海莊（一七九九―一八八二）は、江戸の大窪詩仏（一七六七―一八三七）に漢詩を学び、多くの儒者・漢詩文家と交わった。湯浅の古碧吟社に参加し、盟主垣内己山を継承して地域の文人と集う。また藩や朝廷へ海防策を建白し、農兵取立にあたった。正妻光は、俳人・戯作者として知られた地下官人富士卯（一七五九―一八一九）の娘である。

「菊池海莊翁事績」によれば、海莊は天保飢饉の際にさまざまな救荒策を実施し、紀州藩地士（一八三九年）となつて、独礼格（一八四〇年）、二〇人扶持（一八四三年）を与えられた。嘉永三年（一八五〇）には日高・有田両郡文武総裁を命じられた。嘉永六年（一八五三）、海莊は六斤野戦砲などを製造し、広村天王浜に設置した。明治二年（一八六九）二月には有田郡民政局副知事をつとめ、明治七年（一八七四）八月、明治天皇から純銀三組盃と金二〇〇両を下賜された。

海莊には、各種建白や漢詩集など二〇〇冊を超える著作があつたとされ、海莊自身の日記として、「海莊手記」（一八六五―八〇年末）一二五冊がある（うち二五冊分は●）。また、いわゆる風説留である「風雲雜記」（一八六二―六九年）三八冊【写真2】があり、江戸店や各地の友人・門弟からの書翰や来話情報、自身の活動記録が留められている。維新後の「民政局御用留」四冊、「菊員外筆記」七冊も基本的

に同じ性格の風説留である。この日記と風説留は、いずれも明治四一年（二九〇八）に南葵文庫に寄贈され、その後下げ渡されたものと思われる。

風説留の豊富な記事からは、海莊が紀州有田郡・日高郡の地士や地域の知識人ネットワークの中核にいたことがわかる。代表的な情報源・登



写真2 「風雲雜記」

場人物としては、浜口梧陵・維新後の和歌山藩大参事、駒通頭、県会議長／瀬見善水・日高郡大庄屋、維新後の和歌山藩少参事（小池操亭は実弟）／由良義溪・京都で活動、維新後は岩倉使節団に随行、実業家／大藤幽叟（藤井高雅）…吉備津宮社家／柏岡恕堂…大坂の情報提供者、大坂の天満与力とも言われる／小野石齋…長州の国学者、広村に在留、維新後は神祇官等に出仕／柏木常雄・田辺藩士、維新後は田辺藩権大参事／伊達五郎・紀州藩士、伊達千広の養嗣子で陸奥宗光の義兄、などがいた。

ここで実際に、文久年間の記録を「風雲雜記」から抜き出してみよう。

▼文久三年（一八六三）正月七日、海防のため幕府老中が紀淡海峡の巡見にやつてきた。軍艦奉行勝海舟も同行し、海莊や梧陵は召し出されて意見を述べている。加太浦に乗りつけた蒸気艦の上から海舟や千葉重太郎が「手招き申され、直に参り候よう」声をかけるが、紀州藩の役人舟が邪魔になつて近づけない、さらに「苦しからず候、右役人乗組みの小船をつたい参り候よう」と命じられ、役人を尻目に蒸気艦へ乗り込んだという。このとき小笠原老中から「多年承り及び候海防事情に付き憂慮の段神妙のよし」と声を掛けられた様子を記している。海莊らは紀淡海峡の形勢につき意見を述べている。

▼正月二日、海莊らは上京し、朝廷の国事御用掛で侍従の裏辻公愛に拝謁して、「尊王攘夷の義に付き多年勤勞の赤心神妙」なりと言葉をかけられた。次いで大原重徳や庭田重胤にも面会している。

▼大藤幽叟は海防のため紀淡海峡に大暗礁を建設しようと奔走していた。七月二三日、幽叟は海莊と梧陵宛てに、朝廷工作が功を奏し、二人を台場監察使東園基敬の旅館へ召し出せとの内意がくだつたとして、上京を依頼している。ところがこの三日後の二六日、幽叟は激派に暗殺され、三条大橋西詰北側の高札場に首がさらされた。海莊らのショックは大きかつたであろう。

▼八月一日、長州勢力や急進的な尊攘派の公家が朝廷から排除される政変が勃発する。京都で活動した由良義溪は、海莊・梧陵・石齋・宜仲（海莊の養子菊崖）へ宛てて「御因循を唱え候方御参内に相成り、正義の方御さし留め」と報知するとともに、「最早僕の身命も今晩かぎり」と決死の覚悟を知

らせた。身の危険を感じた小野石齋は長州へ去ることになった。

わずか半年ほどの記事の紹介だが、激動の時代の一端を感じるものが出来るのではないだろうか。日高郡の医師羽山大学（一八〇八―七八）の風説留「彗星夢草子（雑誌）」一一九冊など、海荘につながる情報ネットワークの存在もすでに宮地正人氏の研究によって明らかになっている。足掛け一〇年にわたる風説留の詳しい分析は今後の課題であろう。

維新後、新政府は開化政策に転じることになる。高齢で西洋事情に疎い海荘は、有田郡民政局副知事も半年で罷免されていた。海荘の情報記録は地士が廃止される一八七一年まで、日記は亡くなる直前の一八八〇年まで続いている。

海荘関係では、伊都の彫工九鬼虚

白による「海荘居士肖像」【写真3】（一八七五年）、「陣笠」、「大砲模型」【写真4】などがあり、明治天皇から拝領した銀盃や関係史料などを紹介した。

4 菊池（垣内）家の書画

近代の菊池家は、海荘の孫、新家六代鉄溪（一八五六―一八九四）、その弟で本家一二代を継いだ晩香（一八五九―一九二三）の兄弟が支えていた。晩香は、早稲田大学教授をつとめた漢学者で多数の著書があった。菊池本家の多くの書画コレクションの中には、近世から受け継がれたものに加えて、



写真4 「大砲模型」



写真3 「菊池海荘居士肖像」

晩香の時代に収集されたものも多いようだ。当日は、「祇園尚濂山水画」や「梁川星巖山水画」、それに菊池海荘漢詩の掛軸などを披露した。

5 紀州徳川家由来の品々

新家七代の菊池武芳（一八八三―一九七四）は橋本市山田の山本家から養子に入り、台湾総督府につとめた。ここで紀州徳川侯爵家の徳川頼倫の台湾旅行受入れを担当し、その縁だろうか、戦中・戦後の徳川頼貞侯爵家家扶・理事をつとめ、その母久子（一八七三―一九六三）の滝野川別邸の事務主任をつとめた。このときの家扶日誌（一九三三―四七年、うち六冊は●）が残されている。武芳は久子に信頼され、紀州徳川侯爵家の数多くの所縁の品を下賜された。徳川茂承・則子夫妻や頼倫・久子夫妻の書画、さらに数多くの写真史料は、紀州徳川侯爵家の関係史料として貴重である。

以上、紀州栖原の豪商菊池家と幕末の地士菊池海荘、全国的にみても注目される貴重な史料群の一端を紹介した。当日は、湯浅町によって代表的な史料の現物がミニ展示会で披露されていた。史料群の本格的な研究はこれからである。今回新たに寄贈された分を中心に、両菊池家史料の撮影データは、東京大学史料編纂所のデータベースからウェブ公開する予定である。今後の活用が期待される。

〈参考文献〉

- ・大山敷太郎『農兵論』東洋堂、一九四二年。
- ・新井敦子「江戸の砂糖問屋―河内屋孫左衛門の場合―」『史論』9、一九六一年。
- ・宮地正人「幕末政治過程における豪農商と在村知識人―紀州日高有田両郡を視座として―」『シリーズ日本近現代史Ⅰ』岩波書店、一九九三年（のち『幕末維新期の社会的政治史研究』所収）。
- ・山口啓二「歴史と現在、そして未来―南紀栖原の豪商菊池家の文書整理を通じて見えてきたもの」『ばさら 名古屋大学日本史通信』2、一九九九年（のち『山口啓二著作集』第3巻所収）。
- ・塚田 孝「都市における社会Ⅱ文化構造史のために」『都市文化研究』1、二〇〇三年。
- ・村井章介「陸奥宗光『東北紀行』―翻刻と解題（上・下）―」『東京大学史料編纂所研究紀要』31・32、二〇二一・二二年。

（東京大学史料編纂所元教員／古写真研究プロジェクト共同研究員）